

あ・じか・ぽん

上

A・JAP・AN



矢 作 俊 彦

矢

作



彦

新潮社

あ・じゃ・ぱん (上)

著者 やはぎとしひこ
矢作俊彦

発行 一九九七年十一月三十日

四刷 一九九八年四月二十五日

発行者 佐藤隆信

発行所 〒一六二一八七一
東京都新宿区矢来町七一

株式会社 新潮社

電話 編集部〇三(三三二六六)五四二一
読者係〇三(三三二六六)五一二一 振替 〇〇一四〇一
五八〇八

印刷所 株式会社光邦 製本所 加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

価格はカバーに表示しております。



© Toshihiko Yahagi 1997, Printed in Japan

ISBN4-10-377504-1 C0093

2400円

あ・じ・や・ば・ん
上

カバーオブジェ制作——牧野卓

カバーオブジェ撮影——高橋和海

ブックデザイン——鈴木成一デザイン室

アテンション・プリーズ。このフィクションは小説です。あらゆる物語はロマンスなので、登場する団体名、会社名、及び個人名と現実のそれらとは一切関係がないなどと誰に断ずる権利があるでしょう。

『共産主義を地上から掃討したのは、人間の中の**善**なるものの力である（うふふ）』

—— ヨハネ・パウロ二世

第一部

1

と、いったようなこと全部が、初手^{はな}から旨くすすんでいったわけでは決してなかった。

私は長い長い失業期間からやっと脱けだし、ニューヨーク州ニューヨークで、西日本の、とある放送局の現地レポーターに雇われたばかりだった。給料はよかった。車も買い換えたばかりだった。マンハッタンのど真ん中に、七十畳ほどの、狭いけれど快適なアパートも貸与されていた。(畳というのは東西間わず、日本古来の広さの基準だ。彼らは、縦六フィート横三フィートのタタミマットをもって、広さばかりかあらゆることを推しはかろうとする)

ところで、こうしたアパートは、ドクシンリヨウと呼ばれている。たいていの優良企業が不動産部門を持つている西日本社会では、会社が社員の家賃を肩代わりしたり、給料に上乘せするのではなく、こうして直接いくつもの住宅を、——国内にあつては住宅の供給ばかりか、あらゆる公共サービス——保有し運用している。

名古屋の近くにあるトヨタ市が、その成功の一大ページェントだ。

市名が示すとおりトヨタでは、世界最大の自動車会社が上下水道からガス、電気、郵便、電話、義務教育、消防、警察、選挙管理に至るまで、政府に代わって一手に引き受けている。

いや、まったく本当に。

西日本人はワーカホリックだ、西日本企業は労働者を酷使する、個人生活に土足で踏み入る、などなど、世評に高い。しかし、さにあらず。

私の当時のボスは生粋の西日本人だったが、そもそもアメリカ人、ことに私のような黒人は、怠け者でアップラパのパーで権利意識ばかりが強く、下手にそこらを刺激したら、告訴され、西日本叩きにまたぞろひとつ恰好の口実を与えることになるのではないかとびくびくしていたので、仕事はけっして過酷ではなかった。

顔を合わすたび、よく尋ねられたものだ。こんなふうには。

「どないや、切のうないか。しんどいことあらへんか？ 氣いついたら、何でも言うてや」
むしろ休暇をきちんとするように、再三にわたって懇願された。

「辛いんや。わてかて辛いんや。あんたはんが休んでくれんとなあ。——バハマなんかええんとちゃうか？ ホテルの優待券があるんやけど、よかつたら使てんか。うちのケーレッツがやつとんのや」

こうした次第で、CNNから代理人をとおして最初の誘いを受けたときも、西日本以外の世界では、ぴかーに多忙を極めているこの国で、最も多忙、ときには危険を極めるああした職場へ移るなど、この私にはもつてのほか。直接CNN本社から転職を勧めるメールが届いたあとになっても、なお、こいつは絶対、断ろうと決意していた。しかし、——

待てよ。断るためになら、連中に会いに行ってもいいのではないか、と考え直した。

頭の中で、ちゃんと電灯がともったのだ。CNNの本社は、バトンルージュのグランパス大通り十一番地にある。聞くとところでは、バトンルージュで一番大きなビルを持ち、街の六割の雇用を提供している。言わずと知れたルイジアナ州のバトンルージュ——州都にフランス語をぬけぬけ持ちこむなど、他のどこ

で可能だろう。

ルイジアナ！

バンジョーの音色とガンボの匂いが私を手招きした。

送られてきたエア・チケットはもちろん往復、招待の主は国際報道担当の副社長本人だった。その好意を疑う理由はどこにもなかった。

ルイジアナ！

ゴスペルとザリガニの塩茹でが私をそそのかした。

と、言うのは他でもない、二十年ほど前に死んだ父が、その土地を、土地にまつわるすべてを、——ジヤンバラヤを、ディキシランド・ジャズを、ルイス・クラーク探検隊を、あれやこれやを、——蛇や蝎のごとく（これは日本語の言い回しだ）嫌っていたからだった。

何ということだろう。

三十代も半ばを過ぎるころから、私は、父が嫌っていたことをふいにしてしまうという妙な衝動に悩まされていた。父が私に遺した禁忌を、片っ端から破ってやりたいという衝動、——それは年々歳々強くなり、最近では筋金入り、めつきり磨きがかかり、ときおり自分自身でも抑えきれないものになっていた。

たとえば三年前、私はシトロウエンのDS21を買ってしまった。（父はそれを蛙野郎が作ったゼンマイ仕掛けの蛙と呼んでいた）ギリシャ人のくしゃみを聞くために、マンハッタン中のギリシャ人バーを丸一晚、巡り歩いたこともある。（それは父が言うとおり『アプシュルド！』と聞こえた。父がなぜそんな言葉を知っており、なぜギリシャ人に鼻先でくしゃみをされると一時的なインポテントになるなどと信じていたのか、私は知らないが）去年は「ブルックス・ブラザーズ」で買った真っ赤なブレザーコートに純金の特注ボタンをつけてパークサイド・イーストのクリスマス・パーティーを荒らして回った。（これこそ、

父が忌ま忌ましく思っていたことの集大成だった）まあ、その他いろいろ、つついやってしまふのだった。

フロイトのカニバリズムのなせる業？

とんでもハッピーン！（これは日本語と英語の幸福な結婚だ。意味は、——目で見たまんま）それなら話は本末転倒。たえ何だろうと、人は消化不良を唯一の目的に、飲んだり食ったりはしない。

父は、ありとあらゆるものを嫌っていたので、この衝動は私にとって相当高くついた。

その父が、常々、

『ルイジアナなんて、お前、アメリカ人の行くところじゃねえよ。あんなところへ行くのは、ヒトラーかユダヤ人だけだ』と、言っていたのだ。

しかし、それだから彼が、『目覚めた黒人』だったなどと思わないでいただきたい。若き日、南部の旦那衆にどうにかされた過去があったわけでもない。むしろその逆、彼は『風と共に去りぬ』を結構気に入っていたし、キング牧師の名前さえとんとご存知ないような男だった。

一九七二年四月、マーティン・ルーサー・キングが遅ればせながらノーベル平和賞を受賞した夜も、（父はポルティモアの陸軍記念病院に運ばれるのを今や遅しと待ち受ける重病人だったのだが）酸素テントの中、サボテンのように青くぶよぶよとふくらんだ顔をブラウン管に光らせ、私に聞いたものだ。

『なんでこの野郎はアッカカンバーなんて日本語を知ってるんだ』

そのときTVのキング牧師はこんなふうに言っていた。

『アガベは弱い受け身の愛ではない。アガベは共同体を維持し創造しようとする愛である』うんぬん。

実際、父はモハメド・アリを死ぬまでカシアス・クレイと呼び、非国民と罵り、ジョン・フィッツジェラルド・ケネディを、彼が民主黨員でカソリック教徒で、しかも『勝てる戦争を、勝つ前にやめようとし

た』という理由から、蛇や蝎のごとく嫌っていた。

勝てる戦争とは、もちろんヴェトナム戦争のことだ。

一九六八年、JFKが、次期大統領候補に指名されたばかりの弟もろとも、アトランティック・シティで爆死しなければ、そして彼のもくろみどおりホワイトハウスの鍵をすんなり弟の手に譲り渡せたなら、父の言うとおりの結末になっただろう。JFKの頭の中には、就任以来ずっと、インドシナ半島からの名誉ある撤退しかなかった。それができたかどうかは別にして、戦争がその後、五年も続くことはなかったろう。まかり間違っても、ハノイに核攻撃を加えるようなことだけはなかったと、——これはもう、通説になっている。

通説に従おう。通説に従うところからは始めるのが、私たちの仕事だ。ことに、通説が教科書と異なっている場合は。

今、気がついたことだが、父は自分が黒人だと思っていなかったのかもしれない。

では、何だと思っていたのか？

もちろん、ちょっと色の黒い日本人、と。

父は、目に止まる事どもことごとく、やたらめったら嫌っていた。好いていたのは、軍隊とハナコさん、それに日本だけだった。

と、いったようなことが次々と起こった挙句、つまり生まれて生きて数えるのがそろそろ億劫になってくるほどの年月の果て、私は休暇をとって、ルイジアナ州バトンルージュに出かけた。

当時のボスは大変喜んだ。ニューオーリンズにケーレツのゴルフ場がないことを、まるで自分の責任のように残念がってくれるほど。

『堪忍やで。夏の休みは悪いようにせえへんよってになあ』と。

だから、私はどこにも寄り道をせず、空港からグランパス大通りのCNNの本社へ直行した。そのことを、もし彼が知ったなら眉間に皺をよせてこう言っただろう。

『働き過ぎや。ようないで。ようない傾向やで。労使はもっと協調せなあかん』